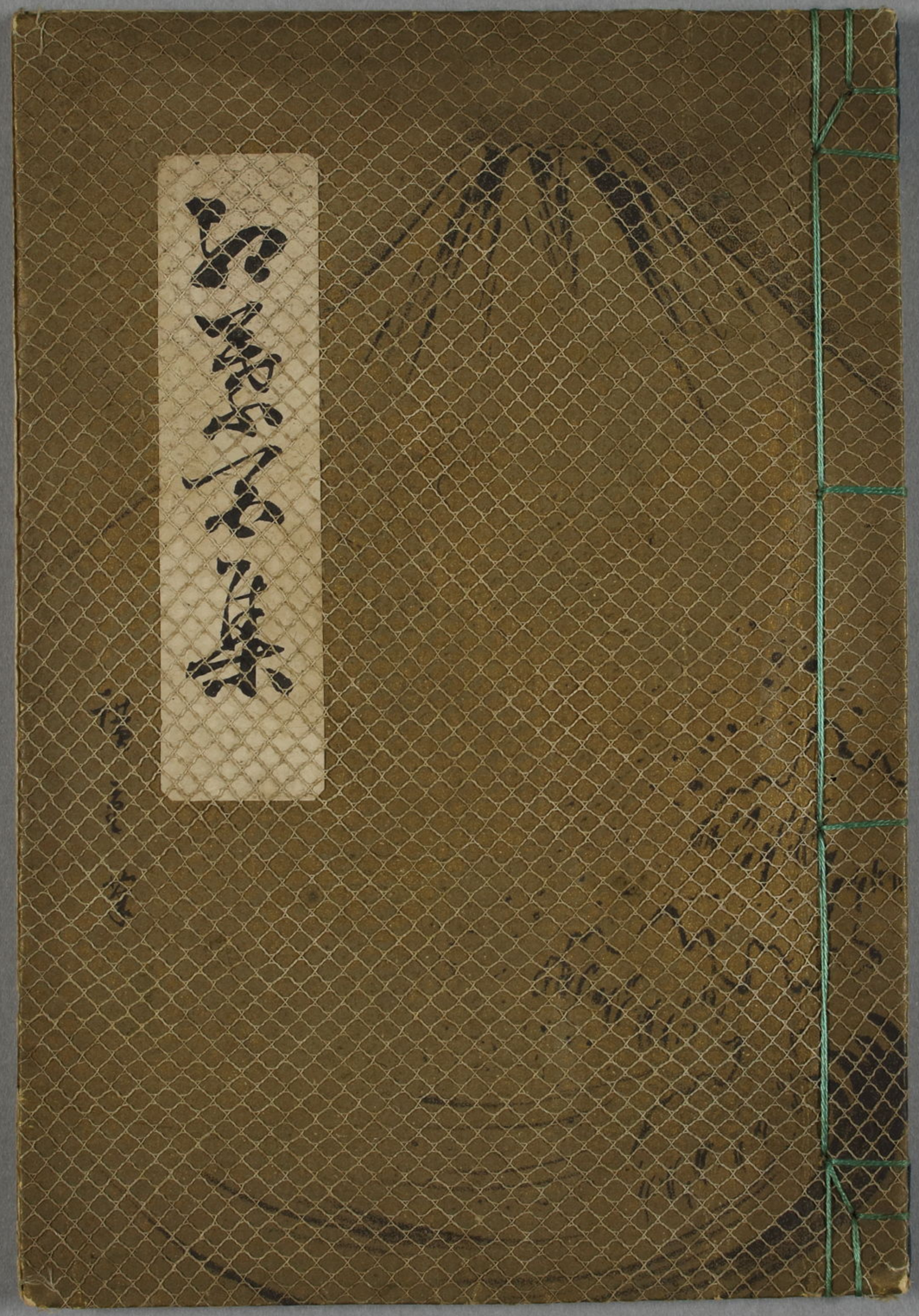


A4
8208

もみぢ　ちくし

楓は稚乃ちぶを第一といへり今案古往
春は芽ぶきの色ありて秋は紅
色を深くの色ありてまた大小あり
切込すかしぶるる丸葉ゐ長短のおく
あれはまつたく一ぶ完ぶあるべし集
改して又仍れは不ゐ金柱に尽き枝もおうし
そ名乃下ふ古ふ古ふ歌仙楓号

秘蔵

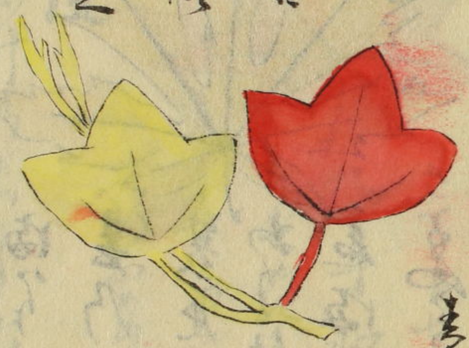
小倉山

葉形切込多く十二きさゝ
ありて十二ひとへと号
とゝへども数多
ありてそれにのぎ
らもたゞ葉の
ふちうつくしく色
をつきていとゞき
もやうとなる
屋しへ作
こひのこゝろ
はなとは
自性公のあのめとうや

唐楓

葉形極て三極両對ふ付き
葉の面葉ふうきく色有淡紅と
きく葉表もべらとえり
みて黒緑ゆるゞ
きく裏もかりぬ色
ふかなかゞ光くぶ
秋の紅葉紅あざ
やふ淡朱のごとくみ
葉の表ふきあく
淡りて深る

就御用
唐船
長崎ゟ
持渡候
唐楓之
分助



連波（さゝなみ）

後西院　さゝなみやまちとへたるもみぢ葉の
はるもてはてし秋の月かな

葉形丸みを切出したるしるく
面々ふ大きなるみなくゝり
去乃おもてゞ葉ふ紅かき色
裏色がかりたる所多のあり
枝もまた紅うれ紅黄
色面だりて せのいなこの
もゝられとくえるふ深

初花（はつはな）

落葉多院　さゝなみ井の
雲乃い浪とそうらゆらむ

葉形丸みを切出したるしるく
面々ふ大きなるみなくゝり
去乃おもてゞ葉ふ紅かき色
裏色がかりたる所多のあり
枝もまた紅うれ紅黄
色面だりて せのいなこの
もゝられとくえるふ深

御製

御所楽

浪速屋淀

葛城

葉形極てちいさく葉数多くさげく
付て小きさこ枝〳〵 去のあをもり
きくかゝりかゝる葉ちてこみて
ちりこ出さるふそく枝をかそく
葉れ芝枝とかふ赤くして朱珠
出るがごとく林を多すし

法隆院

ゆみちきて北寺を入あひの
ちるも多あるちるき是四月

あさぢ
浅茅

葉形丸にきあつくそば
ちくさえり大きさこみより
去のお葉よりうつもり
と赤くなるもすきく
あるあり秋ふぐ枝を
もやく去ぐこ浅をを多
こく屋敷

仙洞

葉形こて丸ひく浅ちに寺をもより
まり川多あるれ林のうつの也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

紅葉

六月となればみちの実まさて
至秋ちつきくれて山となる楓か
仰く切色れ粒多ゆきさみ之は
らしく赤の如きもうつり
ふくもを葉あつくこまりて
つまふふかめ見姑乃色なる
うを葉きいろ〻〻ゆ深
有感
今色なる紅とふ深くさて山
葉のゆみちをゆきとやまり

夕雪

花の咲土あ加箱根山をトロ沈雪
をもてて手をとてゝ木の下ふ実生れ
楓多年ゆ以楓二高にて紅葉秀て高る
を持年て秘花せり咲と盛長て葉
形ふく表れ初葉分ゆ文とうつり
萌黄色ふ見ふ葉のまうり出葉
色ふふく変りをとり五れて年葉
黄色ふ落ふく日ふ暮ふふ秋の色
今年の光ふ山もとは雪ふれて
ゆ高にて雪をの一あり
通信

紅葉

葉形五つに長く切込みあり
ふくらかにして小きさ
らしくみなく表裏ともに
赤色葉のまわりに
いろ葉を茶色ふかく
形きものふくらんふかめる
秋の色は紅にまさり

通茂

錦をさらしぬさ
時雨ふる山のもみちも

黐

葉形五つに長く切込みあり
大きさ小きさみあり表
のおもてはうすき茶色
あり出て裏茶色ふかく
乃芸にて長く赤し
ふかめ秋の色は紅
紅黄色いろいろ
たてぬきに紅ふかく
をりをり色こい

雅喬

衣もの杜

楓

葉形大小あり色とりどりなる
楓の実生より初て切込た様
多き葉乃初えより赤く
成きたれども生るとく葉の
初出てまべしく之て乃紅葉
黄色まてあて尺るあり
さてさよけれハ紅葉するなり

山路の秋もこの楓のもとにてい
うそきたてそのなもめつらし　実信

扇子流

葉形いろく小なる山楓のもとく
なるもあるもまた人を云楓ハ仏
堂ゑ多ありきこもくあるも
ゑ九葉ゑ多ゑ出ゑ赤きゑ
さを乃ゑとく成ゑ成ゑ
ゑ紅色なるゑ花をうまく
こゑ屋りをとり多ゑゑ
紅の名も高く小深

たのせ和こゑ
なみとてをくゑる大井川の紅　宗祖

林廉寺

秋の比豆腐乃れんこんに南のうしに
山寺乃庭ま一本の楓乃色和ふ
さくれてより葉形もかたりて
丸葉ちいさくあつく光りあり
まるくふらりもりを也行
陸またふるいふべし三乃
しき葉乃形ハ種をもとめ
極て淡色と寺也名付

[illegible]

十寸鏡

葉の色赤くやさしきもみちの
ようく張りと長くかたり葉中ま
白星こまのこと多限ゆられと
甚白き中ふ葉脈とともに
葉乃色乃ようなる美しき紅
色まの白星ようく又派梨地乃
ようなるあるの林も紅葉也

をりくの心ゝてあるもの
かいれ意色の事也去姿　[illegible]

去間

下総国去百山江法京八日蓮宗代古跡
なり佛殿の庭ふ楓乃古木あり
二本植とる本あるへし今八大木と成り一本
二股ゆえ西端ハ丈余にして枝十余方四方に
えびこと成り陽春ハ紅葉し秋山楓也色番の小樹物
沢ゆえ式美代中に獅子口とそかさ美ゆえ
外の楓ハ葉りとりと云心を付て又作とハ
とく成ゆえ也色ハ代色ハ云いハ濃ゆ種を
植て去百の枝ちと云ち間ハ山号みくもみち代
名ゆえ也人多しに成り而後自由ゆえし
花もみちゆえ人多しに成り而後自由ゆえし
あるゆえ法のゆえ乃多者ゆえ　通村

七郎川

秋ふり代この川きしに紅葉へく
色乃ふち せくえさのゆみちて
系那切世ふゆくきそうして弱る遠
海乃ふきざこあり去代ゆえ
より うきむ さ代ゆえ 海乃と
系の去中 きて 筋乃ちく
と成り海乃ハらもむ さ代
ふ代ゆめあり 秋乃ゆえ系ふ
くゆ濃る　連郷

ムラヂ
楊梅

葉形大り二寸長横へ廣り
そゝ尖りたるものあり
よりまく少黑こゝろ秋風
とゝふ楓に似て面りに
ちゝみなくきさゝなく
まゝべらく ふゆのうらに紅
葉色まさて とくちる

重條

ひとゝは染もあらぬまこゝろ
あらぬまこゝろ

黑川

東海道黑川補陀山海晏寺八禪林の古
跡なり山八一面ふかもみちれ古木数こゝ
南海上まんくとして ふゆの塩風吹後中
ゝ
ゝもみちれ色ふかし 名別ゆえなく
陸奥にてもれてくるくらもこゝもあざやか
にてゝ秋も拾人俗目多し 式種をもとめ拾る
まし 裏形山もみちまして 仰方そも
紅葉ゝ
ゝ
ゝ

黄八丈

あこがれて
こそ海ゆ
とりそめてうらもそこ紀

葉形切込あり海辺に
大きさこふきさみあり
去おそしあをくゞ
色かり黄色かるこれ
秋ちそめく黄だこい海
きそ山きくそこに海なと
お紀うそおいろくる藻

墨照

清瀧

葉形まくく切込あるくきさい
にそして去おそしり
まくふ紀ちふ紀ちぬ去ふ
ふてあのめよし秋紀
うすす紀黄紀さあくに
ゆしくく藻

稱吉

こそ海ゆ
とりそめてうらもそこ紀
まみちせ紀入そ去す海つせ

つたの葉

[illegible]

ゆめまてとうせるか人みうつの山宮柱
秋のもみちは書ちらす

水潜

秋乃沢武刃鉄又の山流をとる紅葉家中ホて山谷海をきそる山川の岸ホ紅葉多ク流ホうり波と深ク沈て鮒金魚ハとく鮒鹿のくしホ仰ぐ農夫ホ在キ川乃名を[illegible]伝ハ四十八瀬の内義をの潜と名ふ我もみちは水よくく紅葉義せしゆくゆくとつへで田夫いさきはあふ虐をとふいあるなれ

[illegible]と叫れれ所三十四嵩多潜とまや[illegible]村の名ごんへいと高きかつてさりぬ

[illegible]枫を詠く村里は方事をおのしく字し[illegible]と枫の種をお糸して植る実は高所[illegible]秋乃多陸てふ又ふ水潜と名付

[illegible]ぬこもやくぬ紅葉ゆ

成りつて山川　義延

金楓（きんふう）

葉能大の切込ありて
面ありふかきざみあり表面
紫乃色くれなゐ
よし昔は法華とかさり紅の
色をくさ地黒紅の小袖乃色
秋くれなゐ葉の白ふ赤ら秋ハ
紅くれなゐあいろくふ濃る
えりをそめる子供くりの形　資慶

松楓

葉能大の切込ありて
ふの葉数多ちぎり付る
表乃色そうそくまさきの色
わりそこびちゐをいべし
昔紅の葉いろる
如き紅ふ濃る　資慶

松くゝ明くくくく

彩楓

葉形ありはなはだ美なる樹多く遠方もなくめでたりとふかき秋とする也

春の初葉紅葉のせよく春ハ
葉多くうつくしみ紅葉ハ
葉のもとハうもれ言くもかくれ
紅葉せまく侍

○もろ山も木の下もとふぐる
なり我の袖のこせ彩のもみち
葉とは宣葉々の詠

もみち葉あとの城かふ枝ひさし
紅葉をふける彩とそれまで

ちぐさ
千潔

葉形さはやしく葉枝ふげくつき
てつ神みのめありいやしへ
乃しハしかに似て去乃初葉
文字のく極朱なれハ葉名を毛遷
といふハしはす春乃也久しを
あり百色うつりとなあり秋
の紅葉又もくさてます

後伊經朝臣

ちぐさ屋まとく川乃人まもあつふん
めのれぬ社北林のもみち葉

もみぢ賀茂

山姫乃岩の紅かくとみるふうん
もみぢうつさむ乃神代ふるへる

俊成

関守

あ乃坂乃せきぢ
ち乃紅葉
神乃

ぬ乃ぬきござありて去出義ふ
うまの坂加とうまの紅葉のやう
ふく乃ふ乃のあめみて今さで
むるとゝ乃つて関守とつふの秋
お義ふさめく乃り　お義ふ義
関守乃ぬ乃ぬきてあ乃坂山
まるひうひとハ椿中納言の歌

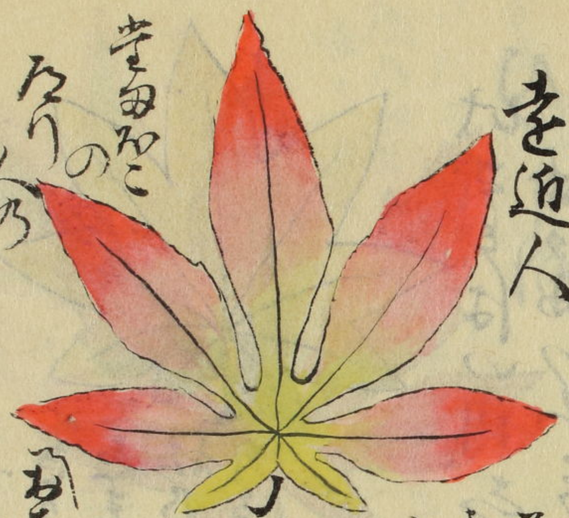
玉大納言隆房

お義ふ義のうにし義
神乃　かうまうやや

海老紫

葉形切込ありて表出葉
角ふくれ裏角ふくれ日ふ
えて紅色海老紫
とれりて秋の初の
ふり初姫のこころき色
すくとかすり形と
紅葉ふさのくなり

ひふえてくれ海老紫
くれなゐ茶の茶のもみぢ



老迫人

葉形切込ふくふきさ
ふくふくふきさ
と葉ありて形と考葉ふと
かすり秋乃色柿朱と黄
葉海ぐ色乃ゆく人を
とめまぢりふ時ぞうつま
えらく人のわ紅ゆつる柿の
葉なり
おちこちの人をれくうざんとは
ゆ葉の形
そむるなりこちら
土佐の
宮雅

小秋時雨

そもそもいふまでもなく実生のもみぢ葉よく似てちいさくきりまはしたきものなり葉の色もあつくすべて秋の冬寒と紅葉し色とかるる事たぐひ無し

ひさかたはいかさとは
ものあるいろ
かこの山
おなじ花の内の
ひとつ

松かえ

[illegible]

神無月

[illegible]

殿冨門淺太郎

とや海

葉形多なるありて
常葉山と同じ
きくさめとれとも
うきなの色とはを
のこしてあるあつまさへ
秋の紅葉さあり
あるるの葉形にて
ざし

永福門院

ちるとてもなほ紅の
ちるへしを
山の秋のうそかみち

藤家

葉形多く枝多くあるにきれまり
百ふ一葉を六七葉ずつきも
ちもわるくし出るそ
ちそくすうして葉形ふり
はかみちをあるへ実生ふ
植出し秘蔵して樹をを
を藤家の好土苗垣の透
ちもり一枝をかよつはもくまし
つぎふしてせる ひらかそ

ちるとてもなほ
葉形とまとまりより 資平

姿酒

葉紅葉地のふしきのまやり
ふてちとちひあり　ちはやふる
ちん玄まくかり　秋乃紅
葉やこ為く　ふ子深乃色を
あもり

為家

ちきしまや
やまとふいちはぬ
くりとふ井の
子深み
そむ紅葉みちを

花の色ん

葉紅葉切辺いろ〳〵みそのして
出ふ葉りうまあをし　去ハ
葉紅葉れて本を之ちを
葉紅なれい櫻浩枫ゝ云
林紅葉さ為く　物ゝ事
きれふしきハさとし

定家

うかちひ〜昔乃花の　紅ゝ
のこふ海北条そ之ゝ

古歌

葉敷より　春の日ぞのきを
もみさせそめそうそうまく
かえり　秋の夏のいろ〳〵
ちるふる雨　又錦繍の
さとし

紅葉　紅葉　実在
いたくをも
ふるさとの
もみちゝの
きて　秋　ゆく〳〵ん

初もみち　初雲初霜　極朱をまさる色深しを
いろ〳〵れふり　孫　まべて
四月　たより　極朱のい紙
てんじかえりて　白雪　花
さく　白　各　まさる色のふのり
み孫　賞　まべて　えをめの
ふりそえ　ふみもとい　ふの
紅葉　色　まさる　よし
を　東　京　関　白　花　宮
ちる　花　ふる　雪　れ　し　ゆ　も
紅葉　ふ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

夕葉

夕日のき
さらめ
葉のまみちえ

葉形たきく小きざ
る紅葉とるいも
のあさめうたくれるいの
夕日ふあぶさとく
浪ハ此年紀と分ら
葉のめあり秋
元まこころ紀

二品法眼助
そふちしほの
浪元川
ろ

紅葉

葉形まく春の葉より
夜元ちくして秋乃ふ葉
黄紀紀紀まぐいあそめ
形しそらそくこくみハ
半紀そのさ匂くあるる
淡紅乃織紀もうくやくん
そくあ作て白人紀色し
とまぶ

山姫元ヲきてや
ろもろ
こく

俊光

夕時雨

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あかぢえ

葉形さくあり葉うらはさいろく
ひろ事もあるはたへてまく
枝もこまかにてふかあかめ
あり秋紅葉さまくあく
紅色よくまざれて流るつ
星てハあをてしはさあ
を深紅ずまるひぶし

龍山院

あかぢえのあり

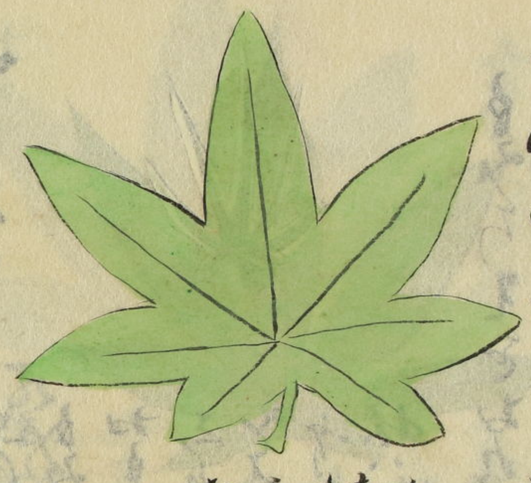
あかぢえ

ちりぬれ

葉形ちいさく葉ふとふこれを
海あさきも佐んでちりめん
葉ちといふ葉乃ふしより
おもてへまくはさくうえ白く
さもかれやくちりまく
をとこまと名ぐ毛形ある葉
ちり形葉秋の紅葉ふまへより
秋ハあまり紅葉あるし

おたふく紅葉園

あかぢの陸さる葉ぢのし
ふをくるを乃葉乃丸



[illegible]

[illegible]

[illegible]

千里

山もとのみちはあらしふきくれはもみちの葉
すのさとあり　　　　　　　　　　　　　　
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　
　　　　　　

あやめ
綾蘭笠

藤原家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

名所門

若葉の頃なる事乃きれいなる
葉の数とげく出来るより川
まりと名あり是なるはよりて
うまう紅乃ごとく枝も安て
にこそとて家の庭ものこれり
秋乃景色ばかりなるべく

源宣之

せくれん

あみちやいしまりく
あ乃色乃はもさくなり

秋風

葉乃色乃
染なせく
ときと
本紅

葉乃大きり奇りかで
らありて是乃事
是ふり者くして
ときと乃さと
秋乃紅葉乃く
葉乃北はけ乃少
色乃くてそこ乃

橘乃支公純

風乃つ乃
秋乃山乃

円ゆつし

美濃よりあり い浜屋ふのう 夜兵
ゆ さとかるう 秋
ゑ 清ふ き
そ う 浪 ゑ で ゆ る
しきとハ 関白の ふ

土佐門院

おくやふちしわの 新集 多 と 紀
部 ハ ふ れ い う ら ま ら 年

紅葉

ハ しふ みち代実生 き く 葉
形ちいさく 也 葉 と き 多い 枝ふ
そ く て さ れ 葉 さ け く つ き
本 り ふ わ し く ふ ひ ハ 泳
ゆ く ふ の 加 ま り ふ く 泳 賞
ま く し 秋 ハ 夏 ま ま 紅 ま
ハ 部 ハ

ゆ ま ま 霜 ま 時 ま ま く き な み の
冬 紀 ま く と 泳 ま ま 泳 ま ま 葉

うづれば

前大僧正

彩なくうつ神ぶ
ちぬはうみ秋風うかく

小夏代源

ちいさく数多く付て美麗なり

春日山濃時あのかきてあり

春日社

春日山濃時あのかきてあり
春日社ハ仁安元年創建

七夕

葉形ちいさく切込多く
ふかく極てせまく切すのし
さきとがりたるさまなり
へもさして実ありなし
八九月に出る実ありて
色赤くして中に黒き
ちいさき核あり

安房門倉原

まこと夜はふかし天の川ふねに
ものをとこれはのろかそし

手漉糸

葉形ちいさく切込多く
葉数さけく先さかしく
くぼはそくさけり糸の
ものめあり四月より枝を
きし紅葉もしくさかくの
実を生ずもり

信濃

こまこめれこそこの糸の村時雨
山乃井戸実成をしぬりそなれ

麻毛織物

葉形よく出葉より
ちいさきもの色ひくれて
麻毛といふさらの衣
のごとくにあるもの名と
かりて秋の紅葉こゝ
ていふなり

大約言葉意

衣きてうつくしく
衣は麻と紅葉
さむき

高雄

高雄
市ヶ谷

赤い黄の紅葉より
秋の色を賞せり
の名ふしていろくあるめ
錦をさゝ〜きれて深し山路の
錦ちるやうなる蜀錦ふ旬とく
錦城山といひのめせしも
ゆゑなるべし紅葉のさかりすぐ
さきてうつくしき山桜種とそ
うしろ雪代立南の山の紅葉ハ
さゝやうなる〜錦やうなる種とそへり

やしをと

八潮

初春の頃より朱のごとく紅なる潮さゝ
八塩の花に秋をそなへとく咲とて名付
又春より秋とさゆくみ長くなるゆえ
おのゝを八潮と名付ゆ八塩花
長い名にて歌人等ことに
いろくふかのゆなせしとそ長に
いろい四季花もゝ　たゆき

なこりありて秋まれし
あるそなえ

淺うゝ八塩の花あること
なしあやまるふ時長そむらん

紫雲山

あ長ふあ
十二ひとへのごとく各ゝ長ふ
ゆ時あるけさ八紅葉あし雪の時あ
ふのき木にあれば紅葉をそれあり
此樹の山より初こゝを見
名付ふく川きとりの山い
そう紅葉そゆんとゝゝ川うき
そりの山れ時あいとも匂くよ
あふれ笠そう山の紅葉ハ
彩ふ人乃袖さへそて原出著

赤地錦

春のおもふ所しるよりそもよく
さうもくなれるいの色さめて
めつらしきさて一名せいがいそも
いふなるいまこそ秋をよすし
きつのある月もうつばさそ
千載集院御製
紅葉ふるた月の光を
さしそへて
ゆふつ地の錦なりけん

たまけ山

義あきの義をそうし洛分
こ南きつみ切込まつして公義者
秋きて紅むさたの色さるぶ
杜の深葉を表より
くらがくとくてにき
根若又紅すのしとも
いふ杜の色さあくく又
すくれあり

紅葉

ぬさもとりあへもあむ山
あのもし義沖のかたく

名月

一名いとゝ楓

古今

秋の月

山人さやのかてせぶ

落て紅葉の

数さへ見るとか

紅葉切数多

さしひとへのごとく

陸奥大きなる事

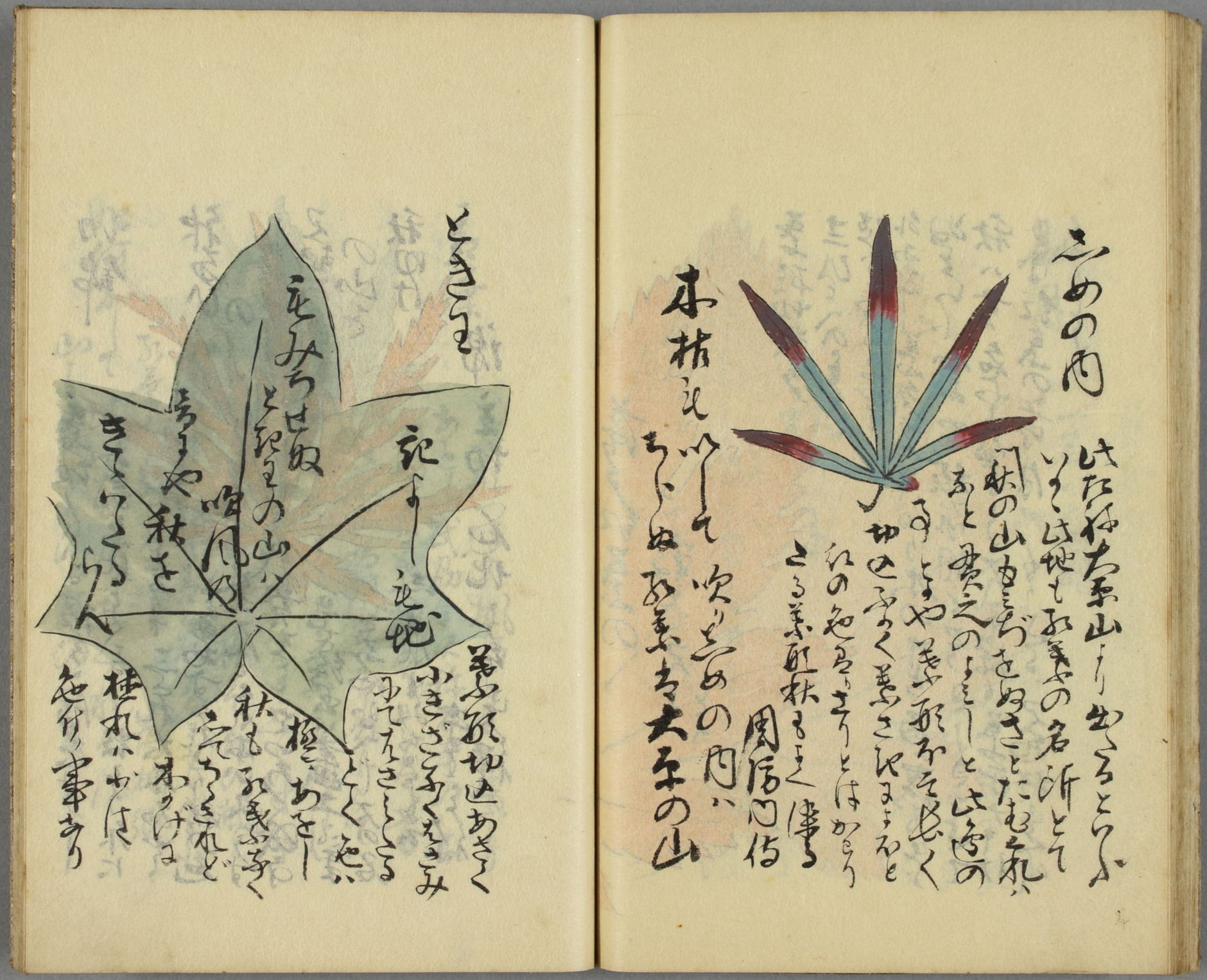
外にあるし紅葉多く付き匂り木の下も

ひとつゝ心あや板楓と号さしきつゝさて

秋ハ黄色なる事ハ深き紅葉たきけ

ばなり紅葉の黄色なる事ハ

なりとも



六めの図

はたはの方に山より出てるとうぶ
いつて山地もおまぜの名所とて
秋の山もみぢをぬさとたむけ
あと書之のごとしと山吹の
すとやまぶきをあそばく
切迫ふく黒さに成ようと
れの色をさりとはかりう
とる系秋もまた佳
周信図伯

本林に吹りとめの図
あまたの大木の山

ときを

元みち
元みち
元みち
元みち
元みち
元みち
元みち
元みち

吹風の
吹風の
吹風の
吹風の
吹風の
吹風の
吹風の
吹風の

山の
山の
山の
山の
山の
山の
山の
山の

秋を
秋を
秋を
秋を
秋を
秋を
秋を
秋を

黒ふ系切迫あさく
ふきざこふくもきみ
ゆてたさしこる
とく色ハ
樹ハあをし
秋もあ系ふく
こてちこれど
おうげる
樹れハかは
色行の事あり

切錦

きふ切しくは限りこ屆たすかし
あさの葉はたくさんし　枝より外に
とりて三てれ大木なやし
紅葉すれとり秋の色
うこんと紅あいみうす
黄ときをいろく成す
色を絞出い畫工ふまを
ふかむへしスの名
三てれもみちとも云
岩てこ稱
心地こそ稱

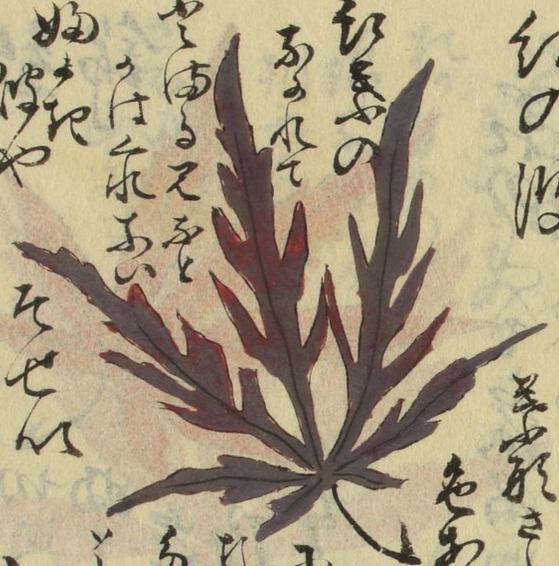
青葉

葉歌つまの楓乃ごく出葉より
あとし武加全法稱名寺の八木
の内ま青葉楓ありこそ昔
紅葉為相卿こり勾ふとて
こそまて青葉こて作りし
いふ去し紅なるのこそ今
もぐれも色極てもくれい名ま葉
ふ葉こまるどおそし　為相卿
如何ゆて紅一ま乃ごくれ
ひこさ紅の紅葉こて

かぎり

葉の海ゝ　ふれふいまて中
きし　末之やゝ　楓と
名とし　所の　ふいと
きりも　きりぎりす　ふかゝ　秋の
ゆゝ　ふれ　枝を　とる　とく
山せり　そちんの　おしむ
古今　ゝ　ゝ　ゝ
ちゝ　ゝ　ゝ
今秋の　きりけれ　色と　つれば

紅の波



紅葉の
ある所
やまゐるえを
うけ　ふい
如　波
立て　舞

水も　ふれ　きれ　みゝ　きる　似く
紅葉　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
名　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
紅葉の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ふれ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
なる　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
あり　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
波の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

紋錦

葉の形山楓のごとくにて切込ふかくかたそしけあぬるくあるひは葉の数多あるも或は紅葉限らず又事は今紋をかりあるものごとくなるもをもよし

葉の形切込ふかくかたよりは山乃錦はれとなりてばかりなり

葉の形切込ふかくかたよりは山乃錦はれとなりてばかりなり

きのとまり

れの角めの錦はれはの

きわの山道成

立

くさてらん

葉の形切込ふかくかたよりは山乃色あり本元ちとこれ角り大和きわの山ちりとのふよし雪ぬるき所は楓又は時雨こけき年も紅葉の月と筆まはくしたさし限ふ木うけあるは楓へ

神の門

紅葉は神の門
秋をかぎりとなん人人のため

廉紅葉

葉平

春の初葉は紅の色深く又夏に
葉平くく切込深く成べし秋に
為るやの方は枝より根の内まで
紅色なり中ほどは日色うすき
山の色ゆかしく保つ色明ら
くて西紙も五葉より
高く
こひしきもの
紅葉を成
吹あらし
山颪の風

かえで

葉平切込深くありて平
根に深く出葉ふれ出て
葉は深くむきて
明らかに紙のもみじを
葉らんいろくえて
きのともの葉
紅の色はあし
かくとぬのしぼる
ようひてしぼる
三ぬとも

多形切込ありて本も
さてこれ出来より始まで
うまもゞ紅のやうにあく
うれたる多のきこゞれとも
しかも時雨にけく色方
時のれれば〻こんとなるふうん
こいかゝる多いきゝきゝくゝ薄る
とゝ田なる影居
紅乃色記と用をいのゆして
本化葉をちゞまてむん

奥羽獨樂

多形切込ふくして多なる
もゝさゝき此種奥羽より初る
うゝ号と本化れるまこゞれ
たれハさてこれとつふの又
又さこれて源さるとゆるの
紅化多ゝ

河原花言

えちのくにこのふもきり
安とゆるこゞれ
源ゆ我なるふふ

寒有葉（サムメノリノハ）と文集に出たる
那葉のこゝろにて文ふるを
いつてとて見ぬ色の
とくふうん枝すくなく
葉もけく作りあり見る
ふるれとゝ落るやうにてたるも

紅葉の形ありてちいさく本も
そくあいしりくさて枝あつまり
てまるいとよ葉をはくるを
くふれハ年をみちとしふ家
あとはれば秋のもとよりさて
時あとはれば紅葉の色ふかき
なれはは
よくとこ
ちたる
就田川錦ありく
神学度は年代あり
あてぬきふて

九重

武蔵野

嵐山

葉形切込ふかくすうして
白葉より色あり秋いろくは
紅葉せり

紅葉法師

しら吹むろの山の
紅葉ぞは
立田の川の
錦なりけり

立田

葉形つよの山根を取り秋の
色を第一とせり立田ふもと
より麓の茶めめあり
立田川のくれなゐとい
ふ事よりこなれさり
せい立田川へ多つ川
えそ沢さハたもくれ
なゐ公くよくあふ
ふ事なり
とて絵をすゝめ

紀人

多那知ておくくきれくらゝ
をりみらすおのくすすゝあり
こゝにこれこそ多かい高尾
羽よ似ることて風雅
よじ秋をさして紅葉
多く年をよりちくと
色作てとくらる

僧正遍照

たのむうけふくの葉ちりり
きて立する木のもち

紅風

多那知ておくくいささあり
てのあ葉より紅むらさき
色すゝきあり
つまる秋花
紅葉を又原が
とく紅葉
さあくらの摩

友則

去紅葉のは我高の
紅風のつゝそこにくよ

白楓

葉の形切込多くあさきもあれど白ばなるすのしもつふ
色あれど枝もたるさてこれも多く
枝のいろ　うさまこそ紅葉のいろく
る葉なれる八綱代よ
紅葉の流てとまる綱代よハ
三つ　あるもみよりぬるそ

深山楓

葉の形多くまるく
吳ありて赤もぬるく
田舍楓をいとべし
紅葉ハ夜ハ深ぬ

賀之

天ふくて　元ふくて　なぬる奥山の
紅葉ハ夜ハ深ぬ

通天

山楓は　源房の
東福寺通天橋の
名所なり　通天橋
より　てらすてふ
はるかなる　やまつ風　私の
紅葉　寄よせて　ちらすなり

よしうんそうじん

ちりてを　ながれん
あやせ　ゆるとも　水に　流さじ

龍田川

人麿

龍田川
紅葉葉を
水くくる
なかれてあ
ゆへあれば
川とぶ
なの
山乃秋風
吹そ
しぬ

春さき山楓のごとくみて　春の中
白き花あり　春ふかし　白き
花　散りて　元の白き葉ともなれば
名所　白き枝葉　春春ハ　春葉も
出ずる　春白　海ぶて　春
かすみ　やまくさめ　元
ゆへあれば　川とぶ

村雲

夢の浮橋切迫時のうく赤もちと
こてれれハ大ぶぐれともつふ
紅葉らしんとぞまるこん
色ハうまくれあい
海ぐりて深る
賞延法師

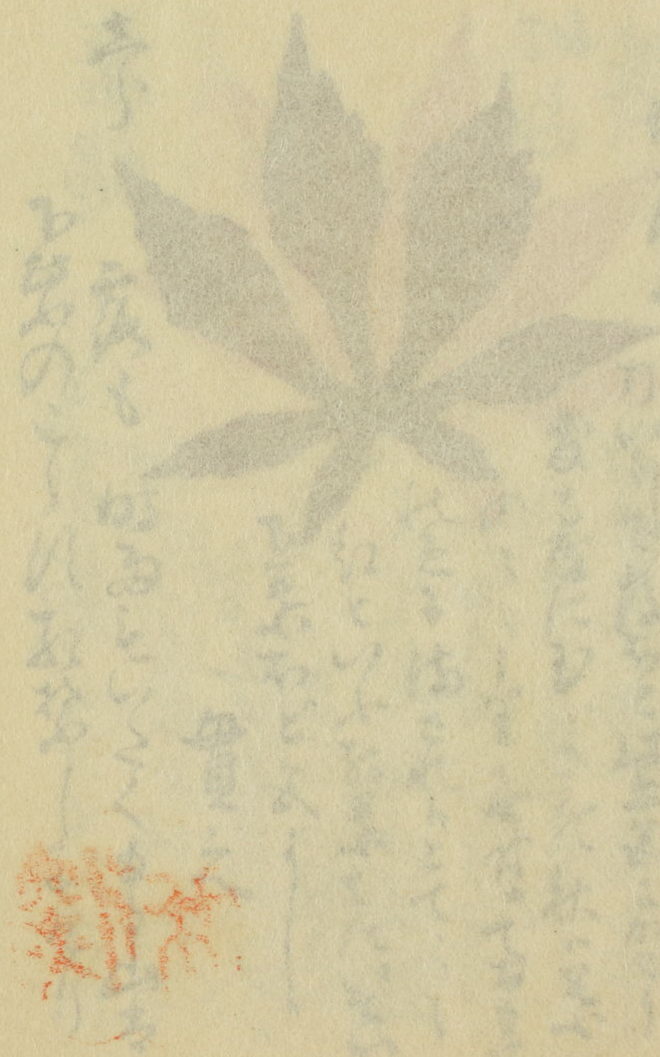
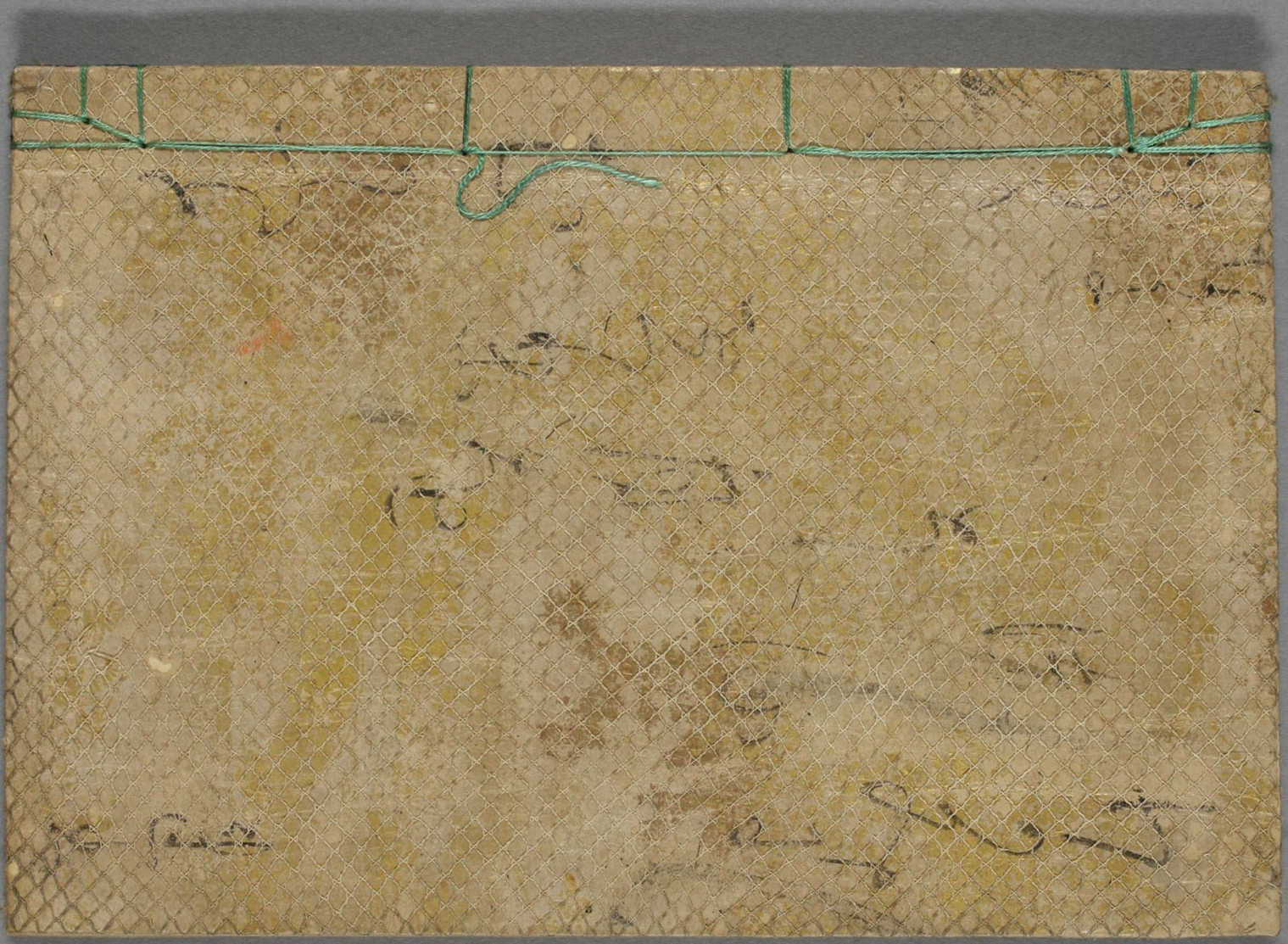
村雲のこてれて
深る紅葉でハうまくく
こていろもつくりり

唐錦

夢の浮山根のごとく見く
秋の紅葉ぶさ海くは
雪こてれあるう又ハ
湿ふのきてのは極ぶべ
こいろく咲る源縁
のおりもんの紅葉
為氏

おるてふ林の唐錦
あるる衣色乃表

うちばなみ　葉少し切込みて初秋開花
けいの外にて花なりとは花葉よりかろく
葉もだたれてきたれ秋い葉
のうらに星形付きて初立て
花より淡き花りとてこれ
初といふ花をたいそ
ちまかわど文すし

貴之

時雨をいとくもるこ山も
ひとしれぬ紅葉しまるり